

現代のカナダ・イヌイット社会における食物分配をめぐる社会関係について：カナダ国アクリビック村の事例を中心に

著者	岸上 伸啓
雑誌名	人文論究
巻	54
ページ	181-198
発行年	1992-08-01
URL	http://hdl.handle.net/10502/5787

現代のカナダ・イヌイット社会における 食物分配をめぐる社会関係について

…カナダ国アクリビック村の事例を中心に…

岸上伸啓

1. はじめに

財やサービスなどの個人間や集団間でのやりとりは、文化人類学の中心的な研究課題である (Mauss 1923/24; Malinowski 1922; Lévi-Strauss 1949; Sahlins 1972)。このやりとりは、通常「交換」という概念によって表現されているが、人類社会における種々の交換の中でも、社会の成員間で見られる食物や獲物の分配 (food sharing) の起源、形態、機能や象徴的な意味の解明は、狩猟採集民社会を研究する者にとっては特に興味深いテーマであると言える (例えば、Weissner 1982; Cashdan 1985; Woodburn 1982; Knauff 1991; Testart 1987; Damas 1972; Wenzel 1988; Burch 1988; 丹野 1991; 市川 1991; 岸上 1991a, n.d. など)。

食物分配に関する研究の中で、最近、注目されるべき流れの一つは、狩猟採集民社会における食物分配の実践とその基盤となる社会関係との関係を解明することであると言える (Damas 1972; Wenzel 1988; Burch 1988; 丹野 1991; 岸上 1991a, n.d.)。例えば、アフリカのアカ・ピグミーを研究した丹野は、その社会では親族関係という社会関係が彼らの分配行動を規定し、生活そのものがシェアリングであると述べている。また、アラスカの北西部に住むイヌイットを長年にわたって研究してきたバーチ (Burch 1988) は、現在でもイヌイットの老人たちは「村に住む全員がよく分配を行っていた」と言っていることを指摘したうえで、愛他主義的な互換活動である「一般化された互酬性」 (generalized reciprocity) (Sahlins 1972) を特徴とする食物分配は、イヌイットの拡大家族 (extended family) (注1) ないし地縁家族 (local family) (注2) 内では一般的ではあるが、拡大家族ないし地縁家族外やその間での食物分配は、「一般化された互酬性」によって必ずしも特徴付けられてはいないと主張した (Burch 1988: 108-109)。それ故に、E. サーヴィスが行っているように狩猟採集民社会 (の食物分配) を「一般化された互酬性」で特徴づけることは必ずしも妥当であるとは言えないのではないか、という疑問を提起してい

る (Burch 1988 : 109)。

この仮説を検証するためには、村が一つの拡大家族からなる場合と村が複数の拡大家族からなる場合を比較すればよいのだが、ウェンゼンル (1988) や岸上 (1991a, n.d.) の研究は、パーティの見解がカナダ・イヌイットの場合にも妥当することを示している。複数の相互に関係の無い拡大家族から構成されているバフィン島のクライド・リバーを研究したウェンゼンル (1988) や、ほぼ一つの親族ネットワーク (広義の拡大家族) から形成されているアクリビック村と複数の拡大家族から形成されているジョージ・リバーやイヌクジュアックの村レベルでの食物分配を比較した岸上 (1991a, n.d.) は、「一般化された互酬的」食物分配と拡大家族関係という社会関係の間に正の相関関係があることを報告している。

伝統的な特定のパートナー (非親族) 間での食物分配は見られなくなってきたものの、食料となる獲物を狩猟や漁撈に参加した者が分配し (第一次分配)、さらにそれは食事や個人的な贈物などいろいろな機会に他の世帯や成員に分配されている (第二次分配)。カナダ国ケベック州のアクリビック村のイヌイットは、「イヌイットはだれとでも食事をとおして食物を分配する。」ことを現在でも強調しているが、本稿では、アクリビック村における世帯レベルでの食事への招待や参加による第二次分配の事例を報告し、吟味することによって、パーティが提起した仮説をさらに検討してみたい。

本論文の構成は、次の通りである。次の第2節では、本研究の背景をなすアクリビック村の社会構造を記述する。そして第3節では食事を通しての食物分配についての事例を報告する。第4節では、事例の検討を通して仮説を吟味し、第5節ではこの研究の成果をまとめる。

2. アクリビック村の社会構造

アクリビック村は、北緯60度48分、西経78度8分に位置し、ケベック州の北西部のハドソン湾に面した所にあるイヌイットの部落である。アクリビック村の形成の歴史については、別の所で紹介してきたが (岸上 1990a; 1992)、ここでは1986年11月現在のアクリビック村の社会構造について述べる。次節で紹介する食物分配についてのデータは、1990年末から1991年初めにかけて収集したものである。1990年末のアクリビック村の社会構造は、人口の増加により世帯数は増加しているものの、その特徴は1986年の時点のものと同じな違いは無いことを断っておきたい。

1986年10月末現在のアクリビック村のイヌイットの人口は、298人で、世帯総数49である。この村にある世帯の規模をみると、13人世帯が1 (約2%)、12人世帯が1 (約2%)、11人世帯が3 (約6%)、10人世帯が5 (約10%)、9人世帯が3 (約6%)、8人世帯が2 (約4%)、7人世帯が3 (約6%)、6人世帯が9 (約18%)、5人世帯が4 (約8%)、4人世帯が8 (約16%)、3人世帯が4 (約8%)、2人世帯が2 (約4%)、

そして1人世帯が4（約8％）である。6人世帯が9、次いで4人世帯が8と多く、1人世帯が4つもある。アクリビック村の世帯規模は、平均が6.1人であるが、1世帯から13世帯とかなり巾があり、多様性があることを示している。1人世帯はすべて30才代の男性であり、調査時点ではその妻子が他の村に住んでいたり、滞在している。世帯員数が10人を越す場合は、世帯主が年配であり、息子夫婦や孫らと同居している事例が多い。そして世帯員数が6人以下と少ない世帯は、若者夫婦を核とした世帯である。

世帯の構成を家族関係の観点から見ると、一人世帯を除くほぼすべての世帯は、血縁ないし婚姻関係にある人々から構成されている（表1参照）。各々の世帯の構成は表1に示す通りであるが、世帯が核家族から構成されている事例は26（53.1％）、拡大家族から構成されている事例は19（38.8％）、1人家族から構成されている事例は4（8.1％）である。若者世帯は核家族から構成されており、中高年夫婦世帯は拡大家族から構成されていることが多いが、これはイヌイットの家族形態（世帯の形態内容）のライフサイクル（核家族→拡大家族→核家族）の一局相を示しているといえる。

次に、アクリビック村がどのような社会関係から形成されているかを見てみたい。世帯主の間に存在する社会関係をみると、直接的であれ、間接的であれ、血縁ないし姻戚の親族関係であることが分かる（図表1）。すなわちほとんどの世帯主は、現在の世帯主から2ないし3代遡れば、共通の祖先から出自しているということができ、広義の拡大家族関係（イラギートという関係のカテゴリー）にあることがわかる。この村落の構成の分析は、別の機会にゆずるとして、村の世帯主を親族関係（狭義の拡大家族）の観点から分析してみると、次のように12のグループに分けることができる。それは、グループ1（世帯主#9、#16、#18、#43）、グループ2（世帯主#7、#8、#45、#46、#47）、グループ3（世帯主#10、#11、#15、#42、#48、#49）、グループ4（世帯主#35、#36、#37、#38、#39、#40、#41）、グループ5（世帯主#44）、グループ6（世帯主#28、#34）、グループ7（世帯主#1、#17、#19）、グループ8（世帯主#24、#25、#26、#27）、グループ9（世帯主#12、#13、#14、#29、#30）、グループ10（世帯主#31、#32、#33）、グループ11（世帯主#21、#22、#23）およびグループ12（世帯主#2、#3、#5、#6）である。これら12のグループは、それぞれ狭義の拡大家族であるといえる。アクリビック村の49人の世帯主は、共通の祖先を持っており、かつ婚姻を通して結びついてきたので、相互に親族関係にあるといえる。

3. 食物分配

アクリビック村のイヌイットは、表面的な観察や聞き取りに基づけば、現在でも食物に関する限り伝統的なものであろうが、外部から持ち込まれたものであろうが、ほぼすべて村人どうして自由に分配しているような印象を強く受ける。現代のカナダ・イヌイット社会

では、12月下旬から1月の初旬にかけては、クリスマスや新年など祝祭の季節であり（岸上 1991b）、この期間には村や生協などが主催する村人全員が参加する昼食会や夕食会がいくつか開催されるため、村人は必ずしも全食事を自宅で取るとは限らない。

かつてのイヌイットは空腹になった時にいつでも食事をとっていたため、現在の日本のように朝昼晩と一日に食事を三度とるというふうな慣習を持っていなかったが、1960年代に入り、定住化が進み、学校教育が普及したり、ヨーロッパ系カナダ社会の影響が大きくなるに従って欧米型の食事のパターンがイヌイットのの人々の間にも広まってきた。筆者のこれまでの観察によると、朝食は各自で取る傾向があるが、昼食や夕食は何人かが集って取る傾向がある。ここで紹介する食事を通しての食物分配は、1990年12月20日から1991年1月1日の期間に筆者が参与観察した世帯レベルの食事のうちの17事例である。ここで言う世帯とは、同一の家屋に住む人々をさす。また、以下で示す世帯番号や食事に参加した者を示す記号は表1および図表1の番号や記号に対応していることを明記しておく。また、紙面の関係上、表や図表は、一箇所にとまとめて掲載することを断っておく。

事例1. 世帯主#7の自宅の夕食

12月20日の世帯主#7の自宅の夕食は、ホッキョクイワナの冷凍魚肉とワモンアザラシの冷凍肉であった。この食事には、#7の世帯主(A)、その妻b、その娘(e)、その息子CとE、その娘2人と彼女らの子供たち4人、そして隣村のポブングニツクから来た女性1人((A)とbの友人)の合計12人が参加した(図表2)。図表2の黒色で示した部分が、現在の#7の家に同居中の世帯員のうちこの食事に参加した者であり、他の人々は他の世帯の成員か他の世帯の滞在者であった。しかし社会関係の観点から、この夕食への参加者を見ると、同じ世帯に住んではいないが同一の拡大家族の成員およびその成員の中の中心的な人物の友人であった。

事例2. 世帯主#44の自宅の昼食

12月21日の世帯主#44の自宅の昼食は、ワモンアザラシの冷凍肉とシロイルカのヒレの部分であった。この食事には、#44の世帯主の妻bとその娘c、cの子供gおよびcの夫(#3のA、1990年のこの時点では#44の家に同居中)そしてcの同名者(sauniq)(注3)である#7のbが参加した(図表3)。なお、cが彼女の同名者を電話で昼食に招待した。この昼食に参加した者のうち、図表3の黒色で示した部分が、当時の世帯#44の家に同居中の世帯員のうちこの食事に参加した者であった。この食事に参加した者を、社会関係の観点から見ると、同一の拡大家族の成員とその成員の一人の同名者であった。

事例 3. 世帯主 # 7 の自宅の夕食

12月21日の # 7 の自宅の夕食は、チキンを煮た料理、マッシュポテト、ホッキョクイワナの冷凍魚肉であった。この食事には、世帯主 # 7 の(A)、その妻 b、その息子たち C と E、他の村に嫁ぎ、当時、同村に里帰りをしていた A の娘とその娘の子供（世帯主 # 8 の所に逗留中）および同村内に別世帯を構える # 8 の A と彼を訪問中の彼の妻（ケープドーセットに居住）であった（図表 4）。この食事への参加者のうち、図表 4 の黒色で示した部分が # 7 の家に同居中の世帯員のうちこの食事に参加した者であった。この食事へ参加した者を、社会関係の観点から見ると、すべて同一の拡大家族に属する成員であった。

事例 4. 世帯主 # 7 の自宅の昼食

12月22日の世帯主 # 7 の自宅の昼食は、チキンを煮た料理であった。この日は、世帯主やその息子や娘たちは他の家を訪問したり、狩猟に出払っており、別の所で昼食を取ったために、この世帯での昼食に参加した者は、世帯主 # 7 の(A)の妻 b とその息子 D の 2 人だけであった（図表 5）。この食事に参加した者は、同一の拡大家族の成員であった。

事例 5. 世帯主 # 7 の自宅の夕食

12月22日の世帯主 # 7 の自宅の夕食は、ワモンアザラシの冷凍肉であったが、子供たちはチキン・バーベキューを食べた。この食事には、クリスマス休みにアクリビック村に里帰り中の # 7 (A) の娘とその子供たち、同村に別の世帯を構えている長男夫婦とその息子が参加した。当日、世帯主の # 7 の(A)は不在であったが、その妻 b と息子 C も食事に加わった（図表 6）。図表 6 の黒色で示した部分が、世帯主 # 7 の家に同居中の世帯員のうちこの食事に参加したものであった。この食事に参加した者は、社会関係の観点からみると、同一の拡大家族の成員であった。

事例 6. 世帯主 # 7 の自宅の夕食

12月23日の世帯主 # 7 の自宅の夕食は、ホッキョクイワナの冷凍魚肉であった。この夕食に加わった者は、世帯主 # 7 の(A)、その妻 b、その息子 C と同村に別の世帯を構える(A)の息子 # 8 の A と彼を訪問中であった妻子（ケープドーセット村在住）であった（図表 7）。図表 7 の黒色で示した部分が、世帯主 # 7 の世帯員のうちこの食事に参加したものであった。この夕食に参加した者は、社会関係の観点からみると、同一の拡大家族の成員であった。

事例 7. 世帯主 # 7 の自宅の昼食

12月24日の世帯主 # 7 の自宅の昼食はホッキョクイワナの冷凍魚肉とフライドチキンで

あった。この昼食に参加した者は、世帯主#7の(A)、その妻b、その息子C、E、その娘(e)、同村に別の世帯を構える#7の(A)の長男#8のAとその息子、里帰り中の#7の(A)の娘とその子供であった(図表8)。図表8の黒色で示した部分が世帯主#7の(A)の世帯員のうちこの食事に参加した者であった。この昼食に参加した者を、社会関係の観点から見ると、同一の拡大家族の成員であった。

事例8. 世帯主#12の自宅の昼食

12月25日の世帯主#12の昼食は、シロイルカの皮と骨のまわりの肉およびフライドチキンであった。この昼食に参加した者は、世帯主#12のA、その妻b、その娘dと世帯主Aの姉(#47のb)の娘(#47のh)であった。娘#12のdと娘#47のhは、イトコどうしであり、大の親友でもあった(図表9)。図表9の黒色で示した部分が、世帯主#12の世帯員のうちこの食事に参加した者であった。この昼食に参加した者は、社会関係の観点から見ると、同一の拡大家族の成員であった。

事例9. 世帯主#12の夕食

1990年12月25日の世帯主#12の自宅での夕食は、ホッキョクイワナの冷凍魚肉とシロイルカの肉と皮であった。この夕食に参加した者は、#12の世帯員全員(#12のA、bとその娘cとd)と、#12のAのオイ(姉の息子#47のF)や隣村のポブングニツク村からアクリビック村を訪問中の者(男女各一名)であった(図表10)。ポブングニツク村から来た2名は、#12のbの遠縁の親族であった。図表10の黒色で示した部分が、世帯主#12のAの世帯員のうちこの食事に参加した者であった。この夕食に参加した者を、社会関係の観点から見ると、同一の拡大家族に属する者とその成員の遠縁の者であった。

事例10. 世帯主#12の自宅の夕食

1990年12月26日の世帯主#12の自宅の夕食は、ホッキョクイワナ2匹の冷凍魚肉であった。この夕食に参加した者は、世帯主#12のA、その妻bと娘c、dとAのメイ(姉の娘)#47のh、同村の友人(世帯主#34のAの妻b)であった(図表11)。この友人は、#12のbがオバのように接してきた人物であった。図表10の黒色で示した部分が世帯主#12のAの世帯員のうちこの食事に参加した者であった。この夕食に参加した者を社会関係の観点から見ると、同一の拡大家族の成員とその成員のたいへんに親しい友人であった。

事例11. 世帯主#12の自宅の夕食

1990年12月27日の世帯主#12の自宅の夕食は、ホッキョクイワナの冷凍魚肉(大人)とマカロニ(子供)であった。この夕食に参加した者は、世帯主#12のA、その妻b、娘c

とd、#12のAのオイ（姉の息子）#30の(b)、同村のイトコの男性#6のE、ポブングニツク村から来た老女であった（図表12）。#12のbは、ポブングニツク村出身であり、この老人とは子供の時からの知り合いであった。図表12の黒色で示した部分が、世帯主#12のAの世帯員のうちこの食事に参加した者であった。この夕食に参加した者を、社会関係の観点から見ると、同一の拡大家族の成員、遠縁の親戚の者、友人であった。

事例12. 世帯主#12の自宅の夕食

1990年12月28日の世帯主#12の自宅の夕食は、カリブーの肉を煮たものであった。この夕食に参加した者は、世帯主#12のAは不在であったが、その妻b、娘cとdそして#12のAのメイ（兄の娘）#13のeであった（図表13）。図表13の黒色で示した部分が、世帯主#12のAの世帯員のうちこの食事に参加した者であった。この夕食に参加した者を、社会関係の観点から見ると同一の拡大家族の成員であった。

事例13. 世帯主#12の自宅の夕食

1990年12月29日の世帯主#12の自宅の夕食は、ワモンアザラシの肉であった。この日に、世帯主#12のAが仕留めたワモンアザラシを食べに集ってきた者は、世帯主#12のA、その妻b、娘cとd、世帯主#12の姉の子供たち#47のF、gとh、#12のAのもう一人の姉#30のaとその娘の#30のc、そして隣家の中老婆#15のa（遠い姻戚関係にある者）であった（図表14）。#12のAとこの#15のaの息子は、滑石彫刻家（soapstone carver）であり、たいへんに仲がよかったことをここで付け加えておきたい。図表14の黒色で示した部分が、世帯主#12のAの世帯員のうちこの食事に参加した者であった。この夕食に参加した者を社会関係の観点から見ると同一の拡大家族の成員と親しい関係にある隣人であった。

事例14. 世帯主#12の自宅の夕食

1990年12月30日の世帯主#12の自宅での夕食は、シロイルカの皮であった。この夕食に参加した者は、世帯主#12のA、その妻b、娘cと#12のAのメイ（兄の娘）#11のgであった（図表15）。図表15の黒色で示した部分が、世帯主#12のAの世帯員のうちこの食事に参加した者であった。この夕食に参加した者を、社会関係の観点からみると、同一の拡大家族に属する成員であった。

事例15. 世帯主#12の自宅の夕食

1990年12月31日の世帯主#12の自宅での夕食は、ホッキョクイワナの冷凍魚肉と春に捕らえ冷凍してあったカナダガンの肉を煮たものであった。この夕食に参加したのは、世帯

主#12のA、その妻b、娘cとdおよびポブングニツク村からアクリビック村を訪問し、世帯主#12の家に滞在中の#12のAの同名者であった(図表16)。図表16の黒色で示した部分が世帯主#12のAの世帯員のうちこの食事に参加した者であった。この夕食に参加した者を、社会関係の観点から見ると、同一の拡大家族の成員と成員の一人の同名者であった。

事例16. 世帯主#12の自宅の昼食

1991年1月1日の世帯主#12の自宅での昼食は、ワモンアザラシの冷凍肉であった。この夕食に参加した者は、世帯主#12のA、その妻b、娘d、#12のAの兄#13のAとその妻#13のb、#12のAのメイ(姉の娘)#47のh、#12のAのイトコ#32のA、#12のAのイトコの息子#35のAとポブングニツク村からアクリビック村を訪問中の母子(#12のbの友人)であった(図表17)。図表17の黒色で示した部分が、世帯主#12のAの世帯員のうちこの食事に参加した者であった。この食事に参加した者を、社会関係の観点から見ると、同一の拡大家族の成員と友人であった。

事例17. 世帯主#12の自宅の夕食

1991年1月1日の世帯主#12の自宅の夕食は、ホッキョクイワナの冷凍魚肉とマカロニであった。この夕食に参加した者は、世帯主#12のA、その妻b、娘cとdと#12のAの弟#14のJ、#12のAの同名者およびポブングニツク村からアクリビック村を訪問中の#12のbの友人であった(図表18)。図表18の黒色で示した部分が、世帯主#12のAの世帯員のうちこの食事に参加した者であった。この夕食に参加した者を、社会関係の観点から見ると、同一の拡大家族の成員、成員の一人の同名者と友人であった。

以上、ここでは筆者が参与観察した17事例を報告してみた。

4. 検 討

本論文で紹介した17事例をもとに、アクリビック村のイヌイットの世帯レベルでの食物分配を検討してみたい。

今回の調査で再確認できたことの一つは、カナダ・イヌイット社会では現在でも世帯が必ずしも食事の単位であるとは限らないということである(Dunning 1966)。調査結果が示していることは、世帯構成員が、その世帯で行われる食事に参加する中心的なメンバーであることにはまちがいないが、事例のほぼすべてが、世帯員以外の人間を含んでいた、何人かの世帯員が含まれていなかったことを示している。

では、世帯が必ずしも食事の単位でないとするのがだれが食事に参加するのであろうか。

ここで紹介した17事例の食事に参加した者を分類すると次のように整理することができる。世帯員全員ないしその一部に加え、別の世帯に属しているが拡大家族関係にある人々のみが参加した食事が8事例、世帯員に食え、別の世帯に属している拡大家族関係にある者と世帯員の友人が食事に参加した事例が4事例、世帯員に加え、別の世帯に住む拡大家族の成員と世帯員の同名者（sauniq）が食事を行なった事例が2例、世帯員に加え、別の世帯に属する拡大家族関係にある者とその一人の遠縁にあたる者が参加した食事の事例が1つ、世帯員に加え、別の世帯に属する拡大家族関係にある者、世帯員の同名者や友人が参加した食事が1例、そして世帯員に加え、別の世帯に属する拡大家族関係にある者や隣人がいっしょに食事を取った事例が1つあった。これを社会関係に着目して、表にまとめると、表2のようになる。

拡大家族関係にある者のみ	8例
拡大家族関係にある者+友人	4例
拡大家族関係にある者+同名者	2例
拡大家族関係にある者+遠縁の者	1例
拡大家族関係にある者+同名者+友人	1例
拡大家族関係にある者+隣人	1例

表2. 食事をともにした人々の社会的属性

事例数が少ないので一般化するのは危険だが、あえて言うと、食事に参加した者は、拡大家族関係にある者が中心となり、それに友人、同名者、隣人や遠縁の者が加わっていると表現することができる。さらに世帯レベルの食事に参加する人々を分析すれば次のようになる。拡大家族関係にある者が食事をとることが最も多いのは、カナダ・イヌイットの場合、エゴがその人の両親、兄弟姉妹やオジ・オバの世帯で食事を取る習慣をもっているからだといえる。世帯主#7の世帯での食事に参加した者のほとんどは、親族グループ2の成員であったし、世帯主#12の世帯での食事に参加したのは親族グループ9の成員であった。すなわち狭義の拡大家族の成員が食事をともにすることが多いと言える。

世帯レベルでの食事に参加した友人とは、隣村のポブングニツク村からアクリビック村を訪問中の人々であり、アクリビック村の人々がポブングニツク村に住んでいた頃からの友人であった。訪問中の村では、訪問者は、親族関係にある者、擬制親族関係（注4）にある者や友人の所に、無償で宿泊したり、そこで食事をとることが一般的である。これは、イヌイットが定住生活を始める以前から持っていた慣習の一つである。

世帯レベルの食事に、世帯員の同名者が参加した事例があるが、カナダ・イヌイット社

会においては、同一の名前を持つ者は特殊な社会関係を形成しており、親族関係のような間柄であった(岸上 1990b)。それ故、同名者どうしは、自由に一方の食事に参加することができたが、これもイヌイットの伝統的慣習の一つである。

かつてはキャンプをともした人たちは親族関係になくても、日々の相互扶助関係や友情にもとずいて、食事を共にしたり、食物を分配することがあった。状況が変化した現在では、村の隣人が食事に参加することも昔からの習慣の延長線上にあり、不自然なことではないといえる。

以上から、世帯レベルでの食事を通しての食物分配が行われている範囲は、狭義の拡大家族関係にある者だけに限定されるということは言えないが、その傾向が強いということを指摘することができる。そして、この食事に参加することを通しての食物分配は、イヌイットが定住化する以前から保持していた慣習にもとづいていると考えられる。

5. 小 結

アクリビック村のような現代のイヌイット村落では、(狭義や広義の)拡大家族関係、同名者関係、友人関係や仕事仲間関係などいろいろな社会関係がはりめぐられており、それぞれの社会関係は、食物分配に関しても状況に応じて機能していると言うことができる。現在でも、アクリビック村のイヌイットは、「我々はだれとでも食物を分かち合う」ということを繰り返し強調しているが、現実には、この調査結果から分かるように、友人関係や同名者関係などの社会関係も世帯レベルでの食物分配にかかわっているものの、その分配のネットワークは、狭義の拡大家族関係に基づいているとみることができる(注5)。以上の結果は、世帯レベルでの「一般化された互酬的」食物分配が行われる社会関係と狭義の拡大家族関係との間には正の相関関係があることを示しており、他の研究(岸上1991b, n.d.; Wenzel 1988)の結果と同様に、バーチ(1988)の仮説を全面的ではないにしても、支持していると言える(注6)。

また、食事を通しての食物分配は、定住化する以前のイヌイットが持っていた慣習が現在でも存続しているという証拠であると言える。従って、世帯レベルでの食事による食物分配の実践は、イヌイット社会の急激な変化よりも持続性を示す事例であると考えられる。この100年あまりの間にイヌイット社会は急激な変化を遂げてきたと一般に認識されているが、拡大家族関係の重要性や食物分配の慣習などは、定住化する以前と比べても大きな質的変化はしていないと言えよう。

(謝辞)本研究は、1990-1991年のカナダ国ケベック州アクリビック村での第五次調査の成果の一部である。この調査は1990度カナダ政府の研究出版助成金(FRP)により可能

となった。収集したデータを整理・分析し、執筆するにあたり、平成4年度文部省科学研究費（奨励研究A 課題番号04851053）の助成を得た。カナダ政府および日本国文部省に対し、記して感謝する次第である。本論文の一部を、日本民族学会第27回研究大会（1992年5月23日南山大学）に於いて発表した。この発表に対して国立民族学博物館の須藤健一先生からご批判とコメントを頂いた。記して、感謝する次第である。

注

- (1) G.P.マードックは、一組の夫婦とその子供たちからなる家族集団を核家族と呼び、親族関係の拡大を通して結ばれた。二つ以上の核家族が結びついてできる家族集団を拡大家族と呼んでいる（Murduck 1949 訳本P.24）。イヌイットの親族（関係）を示す言葉としてイラギート（ilagiit）があるが、これは人類学用語のキンドレッドもしくは超大型拡大家族にほぼ相当する。一方、イラギートの中でも、同一の村やキャンプに住む家族を限定イラギート（ilagiit nangminariit）と呼ぶが、これはマードックの拡大家族にほぼ相当する。従って、イラギートを広義の拡大家族（関係にある人々）と呼び、限定イラギートを狭義の拡大家族（関係にある人々）と呼ぶことができる。
- (2) 地縁家族は、世帯家族とともにE.バーチが提唱した概念である。世帯家族（domestic family）とは、一つの家族が同一の家屋にすんでいる場合の家族組織のことを指し、地縁家族（local family）とは、一つの家族の成員が異なる家屋に住んでいるが、その成員は、一つの家族組織の一部として集団行動をとっているような場合の家族組織のことである（Burch 1975:237）。
- (3) 同名者とは、同一の人物に由来する名前を共有する者であるが、彼らは社会・経済的に特別な二人関係を作り出す。詳しく岸上（1990b）を参照。
- (4) 本来は、血縁ないし姻戚関係の無い人々が、特別な方法によって作爲的に親族のような関係を作り出すことがある。このような関係を擬制親族関係と呼ぶ。一般に双系制社会では、エゴ世代を取巻く人間関係の数が少ないので、擬制親族制度は獲得の人間関係を補充するための社会装置であると考えられている（菊地1991:47-48）。
- (5) クライド・リバー村を20年近く調査してきたG.ウェンゼル博士は、かつてはニンギホツク（Ningiqtuq）と呼ばれる食物分配のシステムの作動は拡大関係によって規定されていたが、現在の村の中では、親族関係の範囲を越えて食物分配が行なわれていることを報告している（Wenzel 1988）。
- (6) 「一般化された互酬性」、「均衡のとれた互酬性」や「否定的互酬性」の概念を提唱したのは、サーリンズ（1972）であり、彼はそれぞれの互酬性が社会的距離と相関関係にあるという仮説を出した。一方、E.サーヴィス（Service 1979）は、これを一歩進めて、バンド社会と「一般化された互酬性」との相関関係を打ち出している。バーチの批判は、サー

ヴィスの仮説への批判であって、サーリンズに対する直接的な批判ではないと思われる。サーリンズの仮説とパーチの主張は、相矛盾しないし、本研究は、以前に行なった研究(岸上 1991a, n.d.)とともに、両者の仮説を支持している。

引用文献

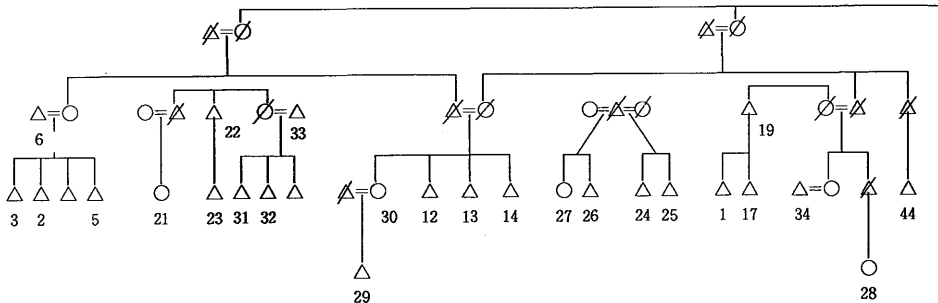
- Burch, E. Jr.
1975 Eskimo Kinsmen. St. Paul, Minn : West Publishing Company.
1988 Modes of exchange in north-west Alaska.
In Ingold, t. et. al. eds. Hunters and Gatherers. Vol. 1, 2.
Property, Power and Ideology. New York : Berg.
- Cashdan, E.
1985 Coping with risk : Reciprocity among the Basarwa of northern
Botswana. Man (N. S.) Vol. 20 : 454-474.
- Damas, D.
1972 Central Eskimo Systems of Food Sharing. Ethnology. Vol. 11 :
220-240.
- Dunning, R. W.
1966 An Aspect of Domestic Group Structure among Eastern Canadian
Eskimo. Man (N. S.) Vol. 1(2) : 216-225.
- Ichikawa, M. (市川光雄)
1991 平等主義の進化史的考察
田中・掛谷編著『ヒトの自然誌』所収 PP. 12-34.
- Kikuchi, Y. (菊地靖)
1991 親族関係と名称体系
村武精一・佐々木宏幹編『文化人類学』所収PP. 12-34. 有斐閣.
- Kishigami, N. (岸上伸啓)
1990a カナダ・イヌイットの居住集団の構成原理について
『社会人類学年報 1990』第16巻 PP. 165-177.
1990b カナダ・イヌイットの人名、命名方法および名前に基づく社会関係に
ついて『民族学研究』第54巻4号 PP. 485-495.
1991a 現代カナダ・イヌイット社会における食物分配について
第45回日本人類学会・民族学会連合大会 10月11日 東京大学教養学部
1991b 現代カナダ・イヌイット社会における贈与交換とメッセージ交換につ
いて : 北ケベック・アクリビック村での1990年のクリスマスを中心に
『人文論究』第52号 PP. 73-86.
1992 カナダ・イヌイットの村落形成
岡田宏明・岡田淳子編著『北の人類学』所収 第3章
アカデミア出版会
n. d. カナダ・イヌイット社会における食物分配の新しい実践について :
カナダ国ケベック州アクリビック村の事例
菊池徹夫他編著『桜井清彦先生古稀記念論文集』雄山閣出版

- Knauff, B. M.
1991 Violence and Sociality in Human Evolution.
Current Anthropology Vol. 32(4) : 391-423.
- Lévi-Strauss, C.
1949 Les Structures élémentaires de la parenté.
Paris : P. U. F.
馬淵東一・田島節夫監訳『親族の基本構造』上・下 (1978 番町書房)
- Murdock, G. P.
1949 Social Structure
New York : The Free Press.
内藤監訳『社会構造』(1978 新泉社)
- Malinowski, B. K.
1922 Argonauts of the Western Pacific : An Account of Native
Enterprise and Adventure on the Archipelagoues of Melanesian
New Guinea London : George Routledge and Sons, Lid.
寺田和夫・増田義郎共訳『西太平洋の遠洋航海者』(世界の名著59
所収)中央公論社
- Service, E.
1979 The hunters. Prentice Hall, NJ : Englewood.
蒲生正男訳『狩猟民』1972 鹿島出版会
- Sahlins, M.
1972 Stone Age Economics.
Chicago : Aldine Publishing Co. 山内訳『石器時代の経済学』
1984年 法政大学出版局
- Tanno, T. (丹野正)
1991 「分かち合い」としての「分配」
田中・掛谷編著『ヒトの自然誌』所収 pp. 35-57. 平凡社
- Testart, A.
1987 Game sharing systems and Kinshipsystems among hunter-gatheters
Man (N. S.) Vol. 22 : 287-304.
- Wenzel, G.
1988 Inuit Subsistence at Clyde River, N. W. T., As A Social Relational
Complex.
Paper read at the Inuit Studies Conference at Copenhagen,
Denmark.
- Wiessner, P.
1982 Risk, reciprocity and social influences on !Kung San economics.
In Lee, R. B. and E. Leacock, eds. Politics and History in Band
Societies. pp. 61-84. Cambridge : Cambridge University Press.
- Woodburn, J.
1982 Egalitarian Societies
Man (N. S.) Vol. 17(3) : 431-451.

(北海道教育大学函館分校)

表 1. アクリビック村の世帯構成 (1986年10月末日現在)

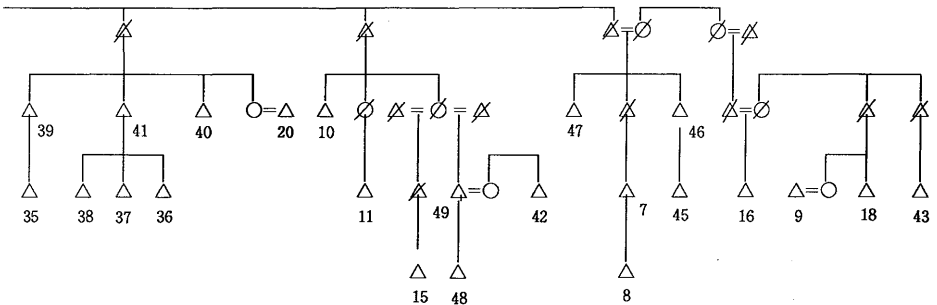
番号	員数	世帯構成
1	6人	A=b-C, D, e, F
2	5人	A=b-C, D, E
3	4人	A=b-C, d
4	3人	A-B, c
5	7人	A=b-(c)/A-d=E-F, G
6	12人	A=b-c, d, E, F/A-c-(G), A-d=H-I, J, kとAのもう一人の息子の子L
7	7人	(A)=b-C, D, E, f, (g)
8	2人	A-b
9	7人	A=b-C, d, E, (F), (G)
10	9人	(A)=b-C, D, E, f, g, H, (i)
11	1人	A
12	4人	A=b-c, d
13	10人	A=b-c, D, e, f, g, h, (i), (J)
14	10人	A=b-c, d, e, (f), g, (h), i/A, J
15	10人	a-B, C, D/a-B=d-(e), (f)/a-C=g-H, i
16	3人	A=b-(C)
17	5人	A=b-C, D, E
18	1人	A
19	3人	A=bおよびAとbの息子の息子C
20	6人	A=b-C/bと先夫との娘の子供(男女、各一名) d e/bとその先夫との息子の養女(e)
21	9人	a-B, C, (D), F, g/a-g-h/a, I/aの母j
22	6人	A=b-(A), (B), c, D
23	8人	A=b-c, d, e, F, g, H
24	11人	A=b-c, D, e, f, (g)/A-c-H, i, J/Dのガールフレンドk
25	9人	A=b-c, (d), (e)/A-c=F-g, H, I



図表 1. アクリビック村における

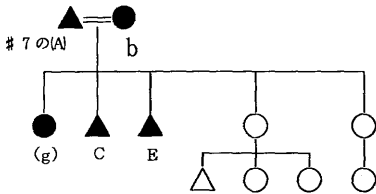
26	1人	A
27	6人	a-(B), c, d/a, E/aの母f
28	4人	A=b-C, D
29	4人	A=b-C, D
30	3人	a-(B), c
31	4人	A-B, C/A, d
32	11人	A=b-(c), d, e, F, G, H/A=b, I, (G)/bの母k
33	8人	A-B/A-B=c-D, e, f, G, h
34	10人	A=b-C, D, E, F, (g), (h), (i), (J)
35	2人	A=b
36	5人	A=b-c, d, E
37	6人	A=b-C, d, e, f
38	5人	A=b-C, (d), E
39	6人	A=b, c, d, e/A=b-d-f
40	13人	A=b-c, D, (E), F, g, h/A=b-c=I-J, k, l, m
41	6人	A=b-c, D, (E), (f)
42	1人	A
43	6人	A=b-C, d, (E), (F)
44	6人	A=b-c, (d), (F)/A=b-c-g
45	4人	A=b-C, D
46	4人	A-B, c/A-c-d
47	11人	A=B-C, d, e, F, g, h, I, J/A=B-d-k
48	4人	A=b-C, D
49	10人	A=b-c, d, e, F, G, (H), I/A=b-d=J

(記号の説明) = : 婚姻関係 大文字 : 男性 小文字 : 女性 () : 養子
 - : 親子関係 / : 核家族の区分 , : 兄弟姉妹関係 空欄 : 死去ないし離別



世帯主間の親族関係(1986年10月末現在)

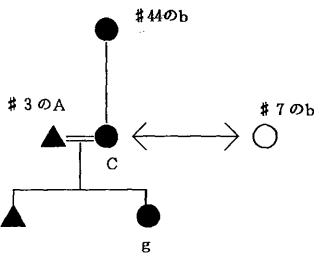
○ from Povungnituk



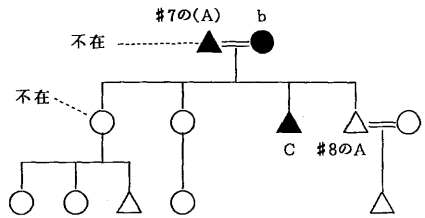
図表 2. 世帯主 # 7 の自宅での昼食に参加した者 (1990年12月20日)



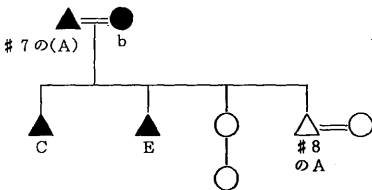
図表 5. 世帯主 # 7 の自宅での昼食へ参加した者 (1990年12月21日)



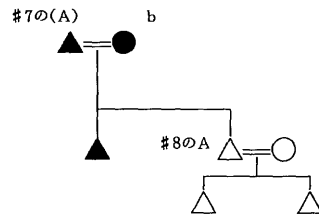
図表 3. 世帯主 # 44 の自宅での昼食への参加者 (1990年12月21日)



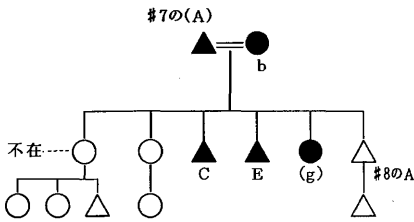
図表 6. 世帯主 # 7 の自宅での夕食へ参加した者 (1990年12月22日)



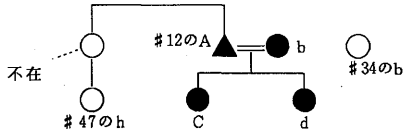
図表 4. 世帯主 # 7 の自宅での夕食への参加者 (1990年12月21日)



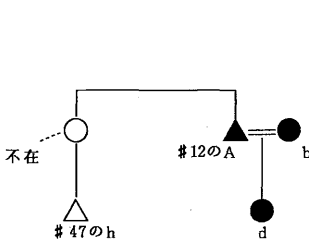
図表 7. 世帯主 # 7 の自宅の夕食に参加した者 (1990年12月23日)



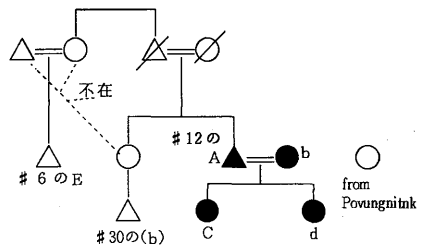
図表 8. 世帯主 # 7 の自宅の昼食に参加した者 (1990年12月24日)



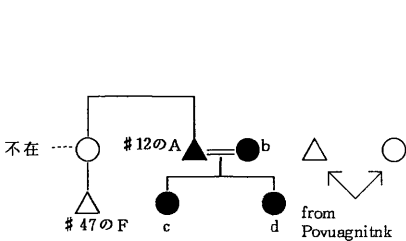
図表 11. 世帯主 # 12 の自宅の夕食に参加した者 (1990年12月26日)



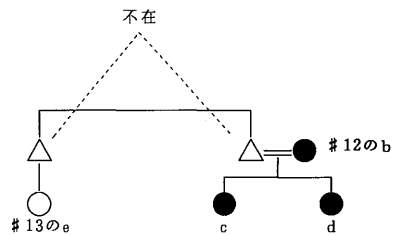
図表 9. 世帯主 # 12 の自宅の昼食に参加した者 (1990年12月25日)



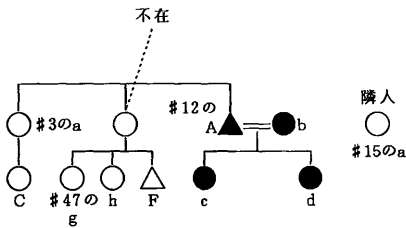
図表 12. 世帯主 # 12 の自宅の夕食に参加した者 (1990年12月27日)



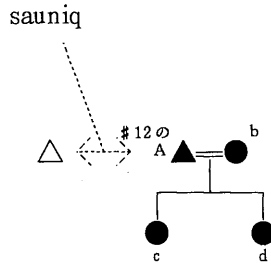
図表 10. 世帯主 # 12 の自宅の夕食に参加した者 (1990年12月25日)



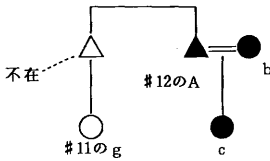
図表 13. 世帯主 # 12 の自宅の夕食に参加した者 (1990年12月28日)



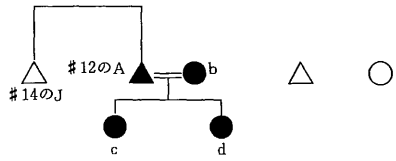
図表14. 世帯主 #12の自宅の夕食に参加した者 (1990年12月29日)



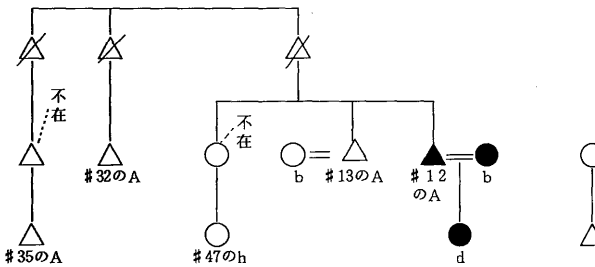
図表16. 世帯主 #12の自宅の夕食へ参加した者 (1990年12月31日)



図表15. 世帯主 #12の自宅の夕食に参加した者 (1990年12月30日)



図表18. 世帯主 #12の自宅の夕食へ参加した者 (1990年1月1日)



図表17. 世帯主 #12の自宅の昼食へ参加した者 (1990年1月1日)